

「生活で活用できる力」の育成を目指して

～幼児と触れ合う活動における「つながり」を生かす指導の工夫～

宮城県 技術・家庭科研究会

栗原市立栗駒中学校

教諭 狩野 祐子

栗原市立志波姫中学校

教諭 小野寺かおり

栗原市立築館中学校

教諭 佐藤 智恵

1 はじめに

栗原市は宮城県の内陸北部に位置し、面積の約8割が森林・原野・田畑で占められた岩手県と秋田県に接する自然豊かな田園都市である。人口は減少傾向が続いており、本格的な少子・高齢社会を迎え、人口減少の加速化が進んでいる。

本地区の家庭科における「幼児との触れ合い体験」を実施しているのは、8校中3校であり、その他は総合的な学習における福祉教育やキャリア教育での体験として、一部の生徒が幼児と触れ合う経験をしているという現況である。

本県では、研究の具体的な方法として、「気付く」「考え、学ぶ」「生かす」の3つの段階を踏んだ学習を「つながり学習」と定義している。

本地区では、平成26年度より、本県の研究主題をもとに、学校の実態に応じながら、「つながり」をキーワードに、少ない部員数ではあるが、意見交換をしながら、授業研究に取り組んできた。

2 研究のねらい

本研究では、「A 家族・家庭と子どもの成長」における「幼児との触れ合い体験」において、これまで支えてくれた多くの人々との「つながり」について気付かせ、幼児の発達や生活に関する知識を生かしながら、幼児との関わり方を工夫できる学習活動の充実を図る。つまり、学習内容が家庭生活や社会生活に関連していることを明確にし、幼児との関わり方を意欲的に考え、将来的な実践につながる「生活で活用できる力」をはぐくむ学習活動を探る。

3 研究主題に沿った具体的な手だて

(1) 「気付く段階」の実践事例

家庭科全体の第一段階での気付きとして、入学

時における「A 家庭生活と家族」の学習を踏まえ、生い立ち調べや自分と家族の生活を比較させた。生徒に家族や地域、友達など、周囲の人との関わりについて考えさせることで、自分の課題を発見し、3年間の学習内容に期待感や見通しが持てるようにした。さらに、年間行事として、毎年3年次に「幼児との触れ合い体験」を実施していることも伝えた。

題材としての気付きについては、幼児の心身の発達や生活についての学習内容が、実際に幼稚園に行って園児と交流する機会や近い将来、家庭を築いた時に活用できることを、授業の中で具体的に示した。

「幼児との触れ合い体験」における事前指導として、幼児への関心を深めさせるために、幼児に対して知りたいことや頑張りたいことを、個々に課題として設定させた。また、幼児と触れ合う機会がほとんどなく、幼児との接し方で心配に感じている生徒が多いという実態から、幼児の心身の発達の様子がわかるDVD教材を視聴させた。さらに、先輩たちが「幼児との触れ合い体験」後に書いたワークシートを掲示し、授業の中で紹介することで、不安を解消させ、授業のねらいを明確にする教具として活用した。

(2) 「考え、学ぶ段階」の実践事例

本地区では、題材指導計画（題材配列表）を作成し、各学校の実態を考慮しながら、共有している。しかしながら、本題材「幼児との触れ合い体験」については、教育的効果が高いと認識はしているものの、前述のように本地区での実施校は40%未満である。実施校の本題材における題材指導計画を表1・表2に示す。

表1 「園児を中学校に招待」題材指導計画

| 時数 | 主な学習内容 |
|----|---------------------|
| 1 | 「触れ合い体験の前に」全体課題提示 |
| 1 | 「幼児が喜ぶ遊びを考えよう」 |
| 2 | 「園児と楽しく交流しよう」中学校へ招待 |
| 1 | 「幼児との触れ合い体験をまとめよう」 |
| | 放課後等に製作活動・発表は掲示物として |

園児を中学校に招待する題材(表1)での「考え、学ぶ段階」を、幼児の特徴や対象年齢を踏まえさせ、グループ毎に幼児が楽しめる遊びを、考えさせる活動とした。

この「考え、学ぶ段階」では、対象児の体型や身体機能、手先の能力が視覚を通して分かるように、DVD教材を視聴させた。また、生徒には各班で考えた遊びから、予想される成果や課題についても相互評価させ、意見交換をさせた。お互いが考えた遊びの成果や課題を共有させることで、幼児の特徴や幼児が安全に遊べる工夫について、改善策を検討するなど、さらに理解が深まるよう配慮した。

「幼児との触れ合い体験」をより充実させるために、幼稚園の先生方と綿密な事前の打ち合わせを行った。また、「幼児との触れ合い体験」後に、園長先生から講評をいただいた。園長先生から、生徒が考えた遊びについて、評価してもらうことで、学びを自信につなげ、幼児に対して、さらに深く考えられるようにした。

このように、教師側も地域とのつながりを意識し、幼稚園の先生方との積極的な連携がとれるように、工夫しながら取り組んだ。

表2 「中学生が幼稚園に訪問」題材指導計画

| 時数 | 主な学習内容 |
|----|----------------------|
| 1 | 「触れ合い体験の前に」個人課題設定 |
| 2 | 「幼児へのプレゼントを作ろう」 |
| 2 | 「幼稚園交流会」幼稚園へ訪問 |
| 1 | 「体験を共有しよう」交流体験発表会 |
| | プレゼント製作が終わらない時は放課後利用 |

中学生が幼稚園に訪問する題材(表2)での「考

え、学ぶ」段階を、今までの学習とのつながりを意識させながら、幼児をよく観察することとした。観察のポイントとして、事前に重点観察事項を生徒に示し、観察記録をとらせた。さらに、観察記録の記入の仕方について、幼稚園での具体的な場面を例示することで、「幼児との触れ合い体験」がスムーズに進められるようにした。

ワークシートの工夫としては、限られた時間を有効に使うため、1時間の授業の見通しが持てる工夫や前時の関連性に気付くよう工夫した。

また、体験前後の幼児と遊ぶ体験に対する気持ちの変化や幼児に対するイメージの変化を言語化できるよう配慮した。

(3) 「生かす段階」の実践事例

生徒は、幼児と楽しく交流するために、放課後等を利用し、積極的に準備をして「幼児との触れ合い体験」に臨むことができた。また、幼児が楽しめる遊びを考えたり、観察のポイントを事前に抑えていたことで、課題意識を持って、積極的に幼児と触れ合うことができたと考える。

園児を中学校に招待する題材(表1)における生徒が考えた遊びと体験の内容を、表3に示す。

表3 触れ合い体験の内容

| | |
|-------|------------------------------|
| 9:40 | 授業開始・園児(年長)到着 |
| 9:50 | 開会行事・顔合わせ |
| ↓ | ダンス(中学生が園児のまねをする) |
| ↓ | ジャンケン列車(幼稚園の先生主導) |
| 10:10 | 園児と交流(考えた遊び・6分間のローテーション) |
| ↓ | <1組> <2組> |
| | 1班:迷路脱出 ミニ借り物競走 |
| ↓ | 2班:ミステリーBOX ゴム鉄砲 |
| | 3班:的あて キャップ金魚すくい |
| ↓ | 4班:お絵かき風船 絵合わせかるた |
| | 5班:水風船すくい お魚ゲット |
| ↓ | 6班:ジパニャンフィッシング 風船パレー |
| 10:50 | 閉会行事 *楽しかった遊びを数人の園児インタビュー |
| 11:00 | 園児を見送る *園長先生に講評をいただく |

事後指導として、「幼児との触れ合い体験」で学んだことをまとめさせ、発表会を実施した。発表会の時間が取れない場合には、生徒がまとめたものを掲示することで、3年間の学習内容に見通しを持たせたり、先輩からのアドバイスを後輩が引き継ぐことで、次年度の動機付けとした。

「触れ合い体験による生徒の内面的な変容」を表4に示す。

表4 「幼児との触れ合い体験による生徒の変容」

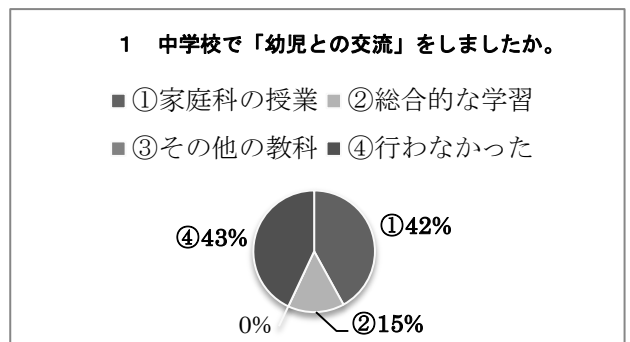
| |
|--|
| <p>①子どもは苦手だったが</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一緒に遊ぶことで苦手意識がなくなった。 ・遊ぶことで人とのつながりを作っていくのだと感じた。交流会は気が進まなかったが、幼児が楽しそうにしているのを見て、自分も楽しくなった。 ・小さい子を苦手とする一番の理由は会話が成り立たないことでした。一生懸命につたない言葉でコミュニケーションを取ろうとする姿がとてもうれしかった。 |
| <p>②どのように接すればよいかわからなかったが</p> <ul style="list-style-type: none"> ・勇気を出して話しかけたら、笑顔で会話してくれた。感情表現がとて大きくて驚いた。 ・幼児は好奇心が強く、感情をすぐに出すので、年上がりっかりフォローすることは大切だと感じた。 ・園児は繊細で「今、この子は何をしたいのかな？」と考えたことで、日常でも相手の気持ちを考えるようになった。 ・幼児と接する時は「優しく」と意識していたが、だめなこととはだめと言うことも必要だとわかった。 |
| <p>③子どもはうるさいというイメージだったが</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交流してみて幼児がなぜうるさいのかがわかったので、今は幼児と同じ目線で優しく接するようになった。 ・話を聞いてくれないと思ったが、話の内容や話し方を変え、少し工夫するだけで接しやすくなるのが分かった。 ・小さい子と遊ぶのは初めての体験でした。最初のイメージはうるさいなど、いい印象はなかったが、交流してイメージが変わった。とてかわいくて本当に楽しかった。 |

さらに、家庭や地域のつながりを深めるため、学級通信や市内の新聞店が発行する「地域新聞ニュース」に、触れ合い体験の様子を記事として掲載してもらった。この発信をきっかけとして、自分が役に立ったという肯定感を持たせ、再度、幼児や家族と主体的に関われることを目指した。

<「幼児との触れ合い体験」の新聞記事>



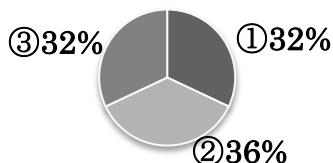
また、本地区にある高校（普通科2校）に通う1年生（現在2年生152名）を対象に「幼児との関わりに関するアンケート」をお願いし、経年変化を読み取ることにした。



| |
|--|
| <p>2 中学校時代に、幼児との交流を行ったことで、自分の考えや見方で変わったことは何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・以前より相手の気持ちを考えるようになった。 ・成長には個人差があること。 ・子どもに「気付かせる」「考えさせる」ことが大事だと思うようになった。 ・いろいろと成長する時期なので、教えることがあれば、手伝いたいと思うようになった。 ・子どもは、注意力が未発達なので、きちんと見守ることが必要だと思った。 ・命の大切さや尊さ、自分の幼い時のことを思い出した。 ・自分を必要としてくれた時の嬉しさを、強く感じた。 |
|--|

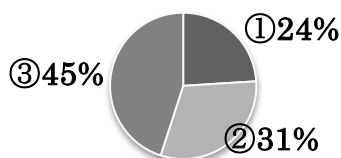
3-1 高校生になってから、幼児（家族・親戚以外）と接する機会がありましたか。
（中学時代、幼児交流を経験あり）

■ ①あった ■ ②ほとんどない ■ ③全くない



3-2 高校生になってから、幼児（家族・親戚以外）と接する機会がありましたか。
（中学時代、幼児交流経験なし）

■ ①あった ■ ②ほとんどない ■ ③全くない



4 高校生になって、幼児（小学生含）と接した機会はどんな時でしたか。

- ① 地域の行事（お祭り、習い事等）
- ② 高校の行事（ボランティア活動等）
- ③ 地区の事業（小学生への教育助手派遣事業等）
- ④ その他（近所づきあい、友達の家等）

5 4の経験の中で、中学校での「幼児との交流経験」が活かされたことは、何ですか。

- ・相手の目線に合わせて話すこと。
- ・自分から積極的に話しかけること。
- ・一つのことに対して自分がよくても、周りの人がどう思うか考えて行動できたこと。
- ・優しく教えること。
- ・「何かして遊ぼう」と言われた時、交流時の遊びを生かした。
- ・幼い子どもを守りたいという気持ちを強くさせたこと。
- ・どのような行動をすれば、幼児が喜んでくれるか理解していたので、すぐに仲良くなれた。
- ・注意した時、しゃがんでわかりやすく優しい表現で話したところ、しっかり聞いてくれた。
- ・幼児と関わる仕事に就きたいと思った。
- ・将来の夢が膨らんだ。

4 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究では、「幼児との触れ合い体験」において、これまで支えてくれた多くの人々との「つながり」について、生徒に気付かせるだけでなく、教師自身も幼稚園や高校の先生方、地域の方々に支えられていることを、再確認しながら、研究に取り組むことができた。

「つながり学習」をもとに、基礎的・基本的な事項を身に付けさせ、「気付く段階」「考え・学ぶ段階」「生かす段階」で、具体的な手立てを用いたことによって、生徒の幼児に対する捉え方や関わり方に変容が見られた。また、高校生を対象としたアンケート結果から、中学時代に幼児交流を経験した生徒の方が、中学時代に幼児交流の経験がない生徒と比べ、幼児と接する機会が多いことが分かった。このことは、中学時代の「幼児との触れ合い体験」という実践的・体験的な学習を通して、幼児への関心が高まり、幼児と接することに対して、抵抗がなくなったためと考える。そして、高校生の記述内容（アンケート項目2・5）を見ても、年月が経っても、中学時代の「幼児との触れ合い体験」で培った知識や技能を、実際の生活に生かしていることが分かり、その成果が実証されたと考える。

そして、「幼児との触れ合い体験」に限らず、別の題材であっても、学習内容を生かす場面をしつかりと設定したり、示したりすれば、生活を工夫しようとする意欲や生活で活用できる力の育成に結びつくものと考えられる。

(2) 今後の課題

高校生対象のアンケートから、43%の生徒が「幼児との触れ合い体験」を中学時代に、全く経験していないということが分かった。よって、今後の課題は、教育的効果が高いと示されながらも、「幼児との触れ合い体験」の実施が難しいという現状を打破する方策を探していくことである。

少子高齢化が深刻になり、益々、幼児と接する機会がなくなっている状況だからこそ、家庭や社会とのつながりを重視しながら、この問題に関して、さらに研究を深めていくという努力が必要だと感じた。